
逆転裁判～嘘と真実～

湊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

逆転裁判～嘘と真実～

【ZPDF】

Z8807A

【作者名】

湊

【あらすじ】

数年後を舞台にした成歩堂法律事務所。あの逆転裁判のファンファンションであり、続きの話です。

プロローグ（前書き）

この小説はCAPCOM様のゲーム【逆転裁判】を元に作りました。予めプレイしていただくと読みやすいと思います。また、そうでない方にも読めるよう努力いたしましたが、読みにくい場合はご了承ください。

本作品中に登場する裁判の進行・法律などは元の【逆転裁判】に準じています。

プロローグ

僕の名前は成歩堂龍一、弁護士だ。

この弁護士バツチをつけてはや5年。やつと名前も知られてきた。しかしこれは僕ひとりでは無理だったと思つ。 その人たちについては機会があつたら。

さあ、もうすぐ裁判が始まる。

第1章【新たな逆転】裁判パート・1

はあ はあ

くそつ！なんでこんな日に！…！

コツ コツ コツ

！誰かが来る！…！…！

「今日も疲れたツス。帰つてソーメンでも食つ
ドンツ！！！」

男は曲がり角に隠れ来た男を突き飛ばし、男は気を失つた。

そうだ 全てこいつのせいに クツクツクツ

4月21日 午前9時48分
地方裁判所
被告人第2控え室

「もうすぐ始まるな。」

ぼくは裁判所に来ている。今日は依頼人の審理があるからだ。その

依頼人は

「もひいやッス」

肩を落としているイトノ「刑事。

「なに言つてるんですか！必ず助けてみせます」

彼は糸鋸圭介、刑事だ。敵ながらあっぱれな刑事。いつも事件がある度に会う。いつか味方になつてくれた事件もあつたつけ。

今回の事件の《容疑者》だ。

「オレは殺してないッス！誰かが 誰かが自分をおとしいれようとしてるッス」

「じつは 昨日別件で忙しくてイトノ「刑事の調査あんまできなく

「なつ、なつ、なんスとお！あんた最近有名になつたからつて調子のりすぎッス、天狗になつてるッス！」

「いえ、そうじやなくて」

「どうせ自分のことなんかどうでも」

『被告人！直ちに入廷しなさい！』

「ほりつー呼ばれますよ」

「ひりあー逃げるなッスう

ははは 。参ったな。

少しここで事件を整理しておこう。

事件はいたつてシンプル。ある路地で事件は発生。人が2人並んでギリギリ通れる道で起こった。被害者は児玉 高志、大学生。腹部を刺され死亡。第1発見者により通報があり警官が来たところ、尻餅ついていたイトノコ刑事がいた。そして凶器にはイトノコ刑事の指紋 その場で現行犯逮捕された。

とにかく最初は情報を集めるしかない それから一気に攻めてやる!

4月21日 午前10時
地方裁判所 第2法廷

ざわざわ

カンッ！

裁判長が木槌を叩く。

『これより糸鋸 圭介の審理を始めます』

「弁護側、準備完了しています」

「検察側、同じく。成歩堂くん、ひさしひさしひですな！今回も遠慮せずにしておきなさい！」

亜内検事。外見はどこでモーいるおじさんだがおそらくベランだ
る。相手は僕を知っているみたいだけど、僕は知らないな。

『では亜内検事、冒頭弁論を』

裁判長。他のひとの言葉に惑わされるあいすべきじこわん。でも最終的に正しい判断をする賢い？ひとだ。

「はい。今回は証言、証拠ともに被告人だけを指していくことを立証していきたいと思います」

『わかりました。では事件のあらましを』

「事件はここ裁判所の近くの路地裏で起こりました。被害者の名前は児玉高志、二十歳。傘でひと突きされ死亡」

『《傘》 ？』

「これが凶器の傘です。頑丈なもので、先がやや尖っています」

〔凶器の傘〕

先の尖った傘。血液が付着。糸鋸の左手の指紋がついている。

こんな風にいろんな証拠品が法廷で提出されていく。もちろんそれはぼくの武器になる。

『ふむう 被告人の指紋がベツトリ』

「それだけではありませぬぞ。現場には被告人の持ち物が落ちていました。2つ提出します」

『受理しますよ。』

『赤エンピツ』

糸鋸が左耳にいつもひっかけているエンピツ。

〔警察手帳〕

糸鋸の警察手帳。

あの2つの証拠品 なにを指しているんだろう。

「では、第1発見者の青木くんを召喚したいと思います」

『わかりました。では係官、入廷させなさい。』

『証人、名前と職業を』

『青木 一郎、大学生です。』

入ってきた証人は若々しい大学生。赤いジャケットが特徴的で、少しおとなしそうだ。

「証人は偶然通りかかったところで被害者と被告人を見たのですね？」

「はい」

『ではそのときのコトを証言してください』

【証言開始】

あれは8時すぎだったと思います。近道と思って裏道に入ったときに、被告人の姿が見えました。すると、右手に持った傘で兜を！

『ふむう。ところで証人は被害者と知り合いなのですかな?』

「あつはい、同じ学部で知り合いです」

『なるほど。では弁護人、尋問を』

尋問。ここでぼくは証人の勘違いやムジュンを指摘する。そして眞実を見い出す！

【尋問開始】

「裏道に入ったとき、被告人に気づかれましたか？」

「いいえ、でも彼を殺したあとで見られて俺はすぐ逃げました」

「なるほど そして問題の殺す瞬間ですが。」

「はい、被告人が傘をいきなり前に出して兜の腹に刺して 思わず叫んでしました」

「ちなみに あなたはこう証言しました。『右手に持った傘を 』
間違いないですね？」

「え そうですが なにか？」

見つけた 証言のムジクン！

「「「異議あり……」」

。

』

『

』

『なんですか！…成歩堂くん！…』

「い　いえ…すみません」

（いけない。頭の中が真っ白になっちゃった。）

『で、どうしたのですかな？』

バンッ！

気持ちを落とす着かせるため、ぼくは机を叩いた。

「いいですか？あなたは確かに見た　『右手』で刺すところを。」

「それが なにか？」

「『刃』にその凶器があります、被告人の指紋がついた」

「？」

「しかし、左手なんですよ。着いている指紋は！」

「え？」

証人に少し焦りが見える。

『どうしたことですか？成歩堂くん』

「単純なことです。このムジコンが一体何を指すのか？」

「待ってください！」

証人の青木が間にに入る。

「思い出しました。もう一度《証言》をさせてください」

『わかりました。』

【証言開始】

「そういえば、左手だったと思います。児玉を刺したあと落ちていた自分のコートを右手に取っていたのでつい右利きだと思つて。」

『ふむう。それなら仕方ありませんね』

(そんなことはない。さつとまた。.)

【尋問開始】

「右利きと思つたのはホールドを手に取ると左利きだったから間違
いありませんか?」

「は、はい。勘違いしてて」

「わかりですか」

「成歩堂くん、もつ無駄な尋問はいいかな?」

(亜内検事　　ー)

「JRのよつて勘違いした理由は明白である。」

『その通りですね』

カンツ!

続いて木槌を叩く。

『成歩堂くん、私にはこの証言に問題があるとは思えません。なに
がおかしいのか私たちに教えてください』

(ただ凶器を持っていた手を証言すればいいのに、それがはつきり
しなかつた。と云つ」とは

（証人は何かウソをついている！――）

「確かに被告人の利き手は左です。それは被告人がいつもつけている『赤エンピツ』がそれを証明しています」

すかさず亜内検事が話す。

「確かにそのとおり しかしそれがなんですかな？勘違いしたこと
に別に問題はないですぞ！」

「ここ」で問題になるのは証人の記憶力になります。裁判長、証人に
証言を求めます！本当に現場を見ていたのか。」

『わかりました。では証人、当夜の現場を詳しく話してください。』

「は はい。」

【証言開始】

あの路地には街灯がなくとても暗いと思いました。人が来ても近く
に寄らないと顔がわからないぐらい。

『では弁護人、尋問を』

「「待つたーー」」

「もう尋問の必要はありません。」

「どういひとかな?」

「証人の言ひてることはめちゃくちゃですー!」

「なにを言ひてるのですかな、成歩堂くん。ここに現場の写真があります。このとおり、現場は暗い!」

『「こーならわたしも通つたことがあります。2メートル離れると顔もわからなくて。いつも暗いから夜道には気をつけてますよ。』

(裁判長 確かに気が弱そうだもんな)

「たつた今、あなたたちが証明してくれました。」

『 ?』

裁判長は手を丸くしている。

「当夜証人はただその場を見かけただけではないことをーー」

「「異議ありーー」」

「な 何を言うのかな弁護人。根拠のないことば

「亞内検事、あなたもわかつてはいるはずです。彼は最初にこいつ証言

しました。《犯人の顔を見た》と。しかし裁判長がおっしゃる通り、少し離れるだけで顔は見えない！」

「ぐつ――！」

『証人、どうですか！』

「ははあ。なんとも」

青木はかなり焦つてこるよつと見えてる。

(とじめをさすなら いいだな)

「裁判長、弁護側は青木一郎氏を告発します。」

『――告発ですとおおおお――』

ざわざわざわざわ

「「異議あり――！」」

「〔冗談はほどほどにしてもらひますかな？〕

「〔冗談で告発はできません。〕

成歩堂は少し微笑むように言つ。

『ふむう、弁護人。なにか決定的な証拠があるのでですか？』

「今までの証言を振り返ってみてください。あの夜道、ものすゞぐ
暗いんですね？しかしこんなにも現場の状況に詳しい。と言つこ
とは！」

証人はただの通りすがりではない！！！

つまりそれはこの事件に関わりがあるということです！！！」

「「異議あり！！」」

「弁護人、君には説明できると言つのかね？！」

「もちろん。」

（ここまで来たらいいえなんて言えないからな。だけど問題は（

この事件は恐らく次のように行われました。

証人と被害者・児玉高志は路地に入つたところで被害者の腹部に傘
を刺した。これが衝動的なものだったのか？故意だったのかわかり
ません。犯行後、突然の足音。それが被告人です。

彼は焦つたはずです。曲がってきたところを突き飛ばし、傘に被告人の指紋をつけて逃走。そして通報したのでしょうか。

「これが真相です。」

「

法廷中が静けさに包まれる。

「ふつふつふ

(ー)

突然笑い出す青木。

「おもしろい人ですね。成歩堂さんと言いましたか。」

「まだ認めないのでですか！」

「あなたはイメージネーションが富んでいらっしゃですね。」

『証人?』

「率直に言いましょう。証拠なんてないじゃないですか。」

(あつ ー)

冷や汗が垂れる。

「ふつふつふつ 成歩堂くん、終わりみたいですね?」

『じゅかり いろいろありますわね。』

(いじまでか ー)

「やつですね　俺が『突き飛ばした』証拠でもあれば別かもしね
ませんね？」

青木が見下すよつて成歩堂を見る。

（突き飛ばした証拠　そんなものあるわけない！）

田の前が真っ暗になる。どうすればいいかわからず、頭を抱えていたところに「」。

「待つたああ……。」

「の壇は！」

「なるほど〜ん、もしかしてパンチ？」

微笑みながら話しかけてくれる「」の少女は「！」

「真宵けやん！」

「」の【綾里　真宵】、ショーカー持つてきたからねー。」

綾里　真宵。倉院流靈媒道の靈媒師で、成歩堂法律事務所の『自称：副所長』。

「ショ　ショーカーへ。」

「なるほどへん忘れたの? ほり、」の警察手帳。」

（あつそうこえぱー真宵ちゃんに警察手帳の指紋調べに行つてもらつてたんだ）

「で、結果は……」

「イトノ口刑事の指紋と、」

（ ）

カニッ！

裁判長が木槌を大きく叩く。

『成歩堂くん！なんなんですか！…』

「あつすみません！」

（珍しくちょっと怒つてゐるな、裁判長）

「どうしたのかな？」

亜内検事が余裕の笑みを見せる。

「イトノに証拠品【警察手帳】があります。」

「ふつー今となつては意味のない……」

「イトノに、ある人物の指紋が付着していました。そう、あなたので

すよ。証人！！」

「 え？」

青木は言葉を失う。

「イトノ口刑事、警察手帳はど！」につけていました？」

「胸ポケットに《半分》「ぶらさげて」

『半分』

「ぶらさげて！」

裁判長と亜内検事が続けて言つ。

「きつと 突き飛ばすときに手のひらがその警察手帳にあたつたの
でしょう どうですか？あなたの言つ通り、《突き飛ばしたこと
》を立証しましたよ 証人！！！」

「ぐつ ぐつう ！」

苦しい表情で汗を垂らす証人。

「「異議あり！…！」」

「もしかしたら現場に落ちていたのを拾つたのかもしねい！」

「「異議あり！…！」」

「そんなことない！じゃあ亜内検事、物を拾つときには指を使わず手
のひらで拾つんですか！…！」

「ぐぐつー！」

「やつたね、なるほどくん！」

（助かつた　）

『弁護人の言うとおりです。どうですか、証人！』

「くつそおおー、成歩堂 ナルホドオ　！――！」

証人 いや真犯人、青木 一郎はその場で緊急逮捕された。当夜、犯人と被害者は大学の帰りに以前貸した《金》の言い争いになり、カツとなつて傘で刺してしまったそうだ。そしてその場にイトノコ 刑事が現れ 。

『亜内検事、青木氏は？』

「はい、緊急逮捕しました。」

『よろしい。では、被告人、糸鋸 圭介に判決を言い渡します。』

【無 罪】

『それでは、閉廷！』

カンツツ！

4月21日 午後1時14分

地方裁判所

被告人第2控え室

(ふう なんとか切り抜けたな)

「やつたツスー・やつたツスー・アンタはサイゴーツスー……！」

「おめでとうござります。イトノ「刑事。」

「あたしがしゃー」持つてこなかつたら今ぐる有罪だつたかもね。」

真宵が自慢げに話している。

「その通りツスね。感謝するツス。」

「さて、そろそろ帰るか。」

「よおし、今日の夕御飯はお祝いついでのみやうめんだよ……。」

「えつ昨日も食べたじや 」

「なあに言つてるの？そんなの関係ないしちゃー」

「ないッス！」

ははは。つたくこの2人は。そんなこんなでこの事件は幕を閉じた。イトノ「刑事はいつもの表情に戻り、真宵ちゃんに手をひっぱられラーメン屋に向かうことになった。

もう4日連続ラーメンだよ、とほほ。

第一章

「新たな逆転」

終わり

テレビから「ユースキヤスターの声が聞こえる。」

「今回の特集はあのヒョウシーエー騒動で有名になつた『ひょうたん湖』のそばに新名所！【ひょうたんヒルズ】をご紹ひしたいと思ひます。」

6月13日 午前9時06分
成歩堂法律事務所

今朝がたまで雨が降っていたが、その雨もやみ、晴れ間がのぞいて
いる。

ここは成歩堂法律事務所。ぼくはここの中の所長だ。以前はぼくの師匠
【綾里 千尋】がここの中の所長だった。しかしある事件で千尋さんは
帰らぬ人となつた。

そして

テレビを見て騒いでいるのは【綾里真宵】。一応ぼくの助手だ。

（一応つてなによー一応つて！）

真宵ちゃんは千尋さんの妹でなんと靈媒師。ぼくは何度もその秘術

を見たことがある。体に靈が宿ると声ばかりが姿まで変わってしまう。

そして真宵ちゃんは2年前に倉院流靈媒道家元になつた。

「なるほどくん、はやく来てよーーー。」

「朝からいつもな。」

ぼくは風呂掃除をしていた。

真宵ちゃんに呼ばれテレビのところへ行くと

「『ひょうたんビルズ』は、この町の『これから』のシンボルとして今日スタートしました。となりにあるひょうたん湖から歩いてわずか10秒!世間の注目を集めています。」

テレビに釘付けになつている真宵ちゃん。

「ねえねえ知つてた?ひょうたんビルズ。」

「なんか建ててるのは見たことあるけど、これだつたのか。」

「じゃあせっかくだから成歩堂法律事務所を移転して」

「真宵ちゃん、ぼくにそんなお金あるわけないだろ?。」

「依頼人来ないしね!」

「うぬやこな。」

確かに名前は知られておるけど、依頼のほうはまだ増えているわけでもない。

（どうしよう 先月と今月の家賃）

ぼくが落胆してことと真面ひやんは続けて

「よし、今日もつ事務所閉めてひょうたんヒルズ行こうか。」

もつ真面ひやんは出かかる準備を終えてこる。

「いいのか これで？」

「ここここ...せせせ今日も誰も」

ピンポン

「お、誰か来たな。」

「うわー」

（真面ひやん、おーへ残念そつだ。）

ぼくは急いでドアを開けた。すると

「ウォッフオンー！元気かな？成歩堂くん。」

「ほ 星影先生ー。」

そこにいたのは星影 宇宙ノ介弁護士^{ほしかげ そらのすけ}。もう68歳になる。千尋さんが昔いた事務所の上司。いつも落ち着いていて、冷静な判断ができるやつ手の弁護士だ。会つのはもう4年ぶりか。

「星影先生ー！おひそじぶりですー。」

「真宵ちゃんがすぐ元^{げん}飛んできた。」

「ウム、ひそじぶりぢやな。真宵クンも一緒にだつたか。」

「ほーー！ヒュウ！今日は何の用事で？」

「わ^わ知つておると思つが、今日ひょつたんヒルズができるだりやう？セレーナ、ワシの友人が探偵事務所をかまえることになつてな。」

「へえーー！やつぱお金持ちは違つた。なるほどくこと違つて。」

「真宵ちゃん、静か！」

「ぼくは真宵ちゃんの口をふさいだ。」

「フォッフォッ。それで一緒に来てもらえんか？」

「え、ぼくたちも一緒にですか？」

「最近有名になってきたからな。その探偵が会いたがつてこらのち

「 も。 」

「 探偵って誰ですか？」

「 笹垣 午藏」と書いてな。ちゅうざくはいへいこの年頃ひさゆ。

（ 笹垣 午藏。名前だけ聞いたことあるな。最近【名探偵】で名を馳せているみたいだけど ）

「 よおし、じゃあ早く行こよー。」

いつの間にか真宵ちゃんが事務所の階段を降りていた。

「 フォツフォツ、真宵くんは行く気満々みたいだよな

（ いや 完璧行かなきやこけない空氣だな ）

「 わかりました

じゃあ早速行きましょ。」

「 ウム。」

事務所のドアに《休業日》のフタをさげて、ぼくたちひょうたんビルズに向かうことになった。

6月13日 午前10時08分

ひょうたんビルズ

入口

（これまた大きい ）

ひょうたん湖の田の前に立つビル【ひょうたんビルズ】。聞いたところまだ完成したわけではなく、まだ上層階は工事中みたいだ。

「すごい迫力だねえ。こんな大きなビル初めて見たよ。」

真宵ちゃんはビルを見上げる。

「さて、Hントランスで篠垣クンの秘書が待っているやつぢや。」

「なるほどくん、早く行こ」

「いつもあの2人は元気ぢやなあ。」

30

6月13日 午前10時10分
ひょうたんビルズ

エントランス

真宵ちゃんに手をひっぱられ、ビルのなかに入った。

「す、じょ、う、な、か、は、空、洞、だ、よ、」

真宵ちゃんの言つとおり、ビルの中は空洞で、各階回りに廊下があると敷かれている。

「なるほどくん、ここならこらこ

「せこせこせいせい」

「真窓ちやんが全てを叫びました。

「わい、110のドレにかに篠垣くんの秘書がいるはずが、や。」

ぐねりと覗渡してみると、スラッシュした女性がドレに近づいていた。へんてこひきがく。

「星影弁護士わあ ドレこますでじょつかへ。

「フム。ワシだわ。」

セレに来た女性ちやんちつとした服装で、俗にこつ『キャロット』のよつなひとに見えた。ほくよつ少し年上かな？

「わたくし、篠垣探偵事務所、所長の秘書の田所 たじゅうしょ 伸美と申します。本日はわざわざお越し下さりましてありがとうございます。」

田所さんは深々とお辞儀する。

「こやこや。丁寧な方ちやな。こひりは篠垣くんが会いたがつていた成歩堂くわいわ。」

「まあ、あなたがあの成歩堂弁護士わまで？」

「はい、成歩堂です。あれ？田所さんませくのことを知つてゐるんでですか？」

（ほんと丁寧だな。）

「宇美でいいですよ。こつも、活躍拝見をめざしておきます。
といふでわざの方は？」

宇美さんは真宵ちゃんを見て、「いや、【格好】が不思議だと
思っているみたいだな。

真宵ちゃんはいつも奇妙な和服を来ていて、いつもそれは靈媒師
のひとが着るもの、みたいだ。

「わたし、綾里 真宵とこにますーなるまへへこの“秘書”です！
よひじくお願ひしますー。」

（たぶん、ただ“秘書”で言いたかったんだろうな。）

「まあ。いかがなよろしくね。」

宇美さんはすっかり真宵ちゃんを気に入つたみたいだ。

「さて、箇所長がお待ちですので行きましょ。」

宇美さんの隣内で高速エレベーターの前に立つてた。少し遅くは
不安になつてた。

「あの 事務所は何階に？
「6の階でござりますが なにか？」

「い いえ 「

「なむほどくんぢつしたの？」

「ほら、幅広いお仕事だからね。」

そう、ぼくは本当に高いところが苦手だ。一度高さ約10㍍のところに架かる橋を渡つたが あれはない。

「あんな高い廊下を歩くなんて

ぼくはため息をついた。

「
」

真宵ちゃんが不気味な笑みを浮かべている。

エレベーターの扉が開く、すると

ל' ט' ט' ט' ט'

目の前には透明のガラス、そして外が丸見え。

ରାଜ୍ୟ ପରିଷଦ

宇美さんの誘導でぼくたちはエレベーターに乗った。
「なるほどくんがんばってー！」

《ボーン》

高速エレベーターだけあって、60階に着くのは早かった。ぼくに

は感じたけど。

「なるほど〜ん?なんか顔色がいい感じだよ?」

「ほくの」とはほつといふ。」

「大丈夫かチマ。」

星影先生が心配そうに尋ねる。

「ひからが事務所入口です。」

案内されたところはビルの内側の廊下ではなく、曲がつて外側の廊下に出たところに事務所の入口があった。しかもまた外が丸見え。

「なるほど〜ん!」に事務所かまえちやいけないね、ひつや。」

「みたい。」

そこには

『 笹垣総合探偵事務所』

と掲げられていた。しかも自動ドア。

「つおつー!勝手に開くとびらだよー。」

「真宵ちやん、これは自動ドアって書つんだよ。」

「あたしにだつてそのぐらいわかるよー。」

少し膨れつ面になる真宵ちゃん。

（怒り気でしまった。）

入ってみると事務所の中はぼくの事務所と同じぐらいの広さで、手前に応接室、奥にドアを挟んで所長室があるみたいだ。応接室にはソファーが2つにすべてガラスでできたおしゃれな机がある。そのほかはと云うと、まだ越してきたばかりのためかまだダンボールがすみに積まれている。

「いらっしゃりでね待ちください。所長をお呼びいたします。」

「なるほどへん、気分は落ち着いた？」

「うん、だいぶね。ありがとう。」

「それにしても やっぱきれいだねーー！」

真宵ちゃんがソファーにどどんと座り、足をばたつかせる。

「おーおー、行儀わる 」

「元気なお嬢さんですね。」

男が所長室から出てきた。ビシッと決めたスーツにネクタイ。髪は短くサッパリしている。

「あー、すみません。」の子あれで 。

「なによあれひーー。」

「申し遅れました。俺が篠垣総合探偵事務所の所長、【篠垣 午藏】です。」

(あれ? いの顔面どじかだ)

「あれ? 覚えてないのか。虫の音よべシルんだだる?」

。

あああああああひーー。

「おまえ あの篠垣かつつー。」

「やつと熙に丑しつくれたみたいだな。」

篠垣はふりふりとため息をついた。

「なんがや知り合にならやったのかー。」

「はー。昔よく遊んだもん。しないだ先生が成歩堂の名前を口にしたときせ驚きましたよ。」

「だから昔までせしかつたのやがやな。」

「はい、すいません。」

「フォツフォツ。いいんぢやよ。」

（篠垣とは中学のときの同級生。卒業してから一度も会っていなかつたな。）

それからぼくたちはいろんな話をした。これまでの経緯、探偵を志したとき、中学時代の話。話してると 真宵ちゃんと星影先生たちはひょうたんビルズの中を探検しに行つたみたいだ。

6月13日 午後12時14分

ひょうたんビルズ

篠垣総合探偵事務所

ガチャリ

男が入つてきた。

「先生、そろそろお時間が。」

「おつと、話しそぎぢやつたな。成歩堂、このひとは馬木 うまき 稲介いなすけ。うちの所員だよ。」

「馬木です。よろしくおねがいします」

とても落ち着いている人だ。紺のスーツを着て、キッチリとした身

だしなみ。おそらく、これは篠垣探偵事務所のルール みたいなど
ころかな。

「……あなたは成歩堂さんですか！？」

「やうですけど」

「私成歩堂先生のファンで いつも裁判傍聴してます！」

「とんだとこにファンがいたもんだな」

「握手 おねがいできますか？」

「あ、いいですよ」

馬木さんは自己紹介を済ませると、奥に行ってしまった。篠垣が時
計を見た。
ぼくは馬木さんと握手した。緊張しているのか少し汗をかいている。

「じゃあそろそろ行くよ。篠垣が元氣でなこりだつたし。」

「しかし 成歩堂、お前変わつてないな。」

「よく言われるわ。」

少し笑つたあとぼくはその場をあとにした。

6月13日 午後12時21分

ひょうたんビルズ

60階・らうか

篠塙と別れて、まくつかに出た。

「なるほどへーん。」

真宵ひやんがそばにしゃつてきた。

「待たせたね。」

「話長かつたねえ！」

「なんせ会つの数年ぶりだからね。あれ、星影先生は？」
「なんか仕事があるとかで帰つちやつたよ。」

「あひや 懲ことしたな。」

頭をかきながらHレベーターのボタンを押した。

「ねえなるほどへーん、篠塙をさつてどんなどだつたの？」

「まあちよつとおとなしいほつだつたかな。最初はぼくたち仲良かつたわけじやなかつたし。」

「ふーん どうして友達になつたの？」

「たしかあれば」

と、話し始めたとしたときHレベーターが開いた。そこには

「 むつ！ナルホドー やんーー。」

「 な ナシ!! やんーー。」

大沢木 ナシ!!。自称ジャーナリスト。ずっと前から知り合いで、いつも片手にカメラを持ち歩いてくる。特徴として、肌は地黒でアフロヘアー。そしてなんと言つても関西弁。

「 ナシ!! やんなどうでなにをしてるんですかーー。」

「 スクープあるとこナシ!! あつ やー。」

「 スクープ？」

「 なんだろうね？スクープつて。」

「 じは言つても別になんかあるわけやないねん。ただのあら探しや。」

「 やつぱつ 」

「 ぼくと真宵ちやんはエレベーターに乗った。」

「 あれ？ナシ!! やん降りないんですか？」

「 こや、 むつ!の隣やつも見たわ。 真宵はんたりとこたほつが楽しやつや。」

「 むつやべ帰るひーりですかね。 て、なるせやべへんー。」

「 高い。」

6月13日 午後12時26分
ひょうたんビルズ
エントランス

「 ここに住みたいなあ ねつなるほどくん。」

「 ううん。」

「 ナルホドー、高いとこが苦手なんか?」

「ええ。気にしてください。」

ぼくたちはビルズの外に出た。そしてビルを見上げる。
「 何度も高いねえ。」

「 ここの晴れ晴れとしたビルの裏ではこうなことがあつたんやけど
な。」

ナシ!!さんがあこげて叫ぶ。

「 裏 ?」

ぼくがそのことについて聞くと、したその時だつた。

バリーンツツー！

上を見ると火が出ていた。と同時に上からガラスの破片が落ちてくる。

「みんな逃げて……」

ぼくが真宵ちやんとナツミさんを連れてビルのなかに入った。

「あ、危なかつた。」

「な、なんや！ なにが起きたん！ ？」

「なるほどくせんこわかつたよお。」

真宵ちやんが泣いてくる。

「とりあえず様子を見に行こー。」

「え？ なんの？！」

ぼくはエレベーターに乗り60階へ向かった。高さなど気にしてもいられなかった。

6月13日 午後12時43分
ひょうたんビルズ
60階・ひょうか

ぼくは無我夢中で辺りを見渡した。すると火を吹いていたのはこの上、61階だった。

「ふう。」

安心したあと、上の階にはある人影があった。

「馬木さん？」

どうやら消火活動をしているみたいだ。ぼくもすぐに階段をかけ上がり、向かった。

「馬木さん！？」

「あなたは 成歩堂さん！？」

「ぼくも手伝います」

大きな火災ではなかつたためすぐに消すことができた。すこし時間が経つて、消防車が下に到着したのが見えた。

6月13日 午後1時

ひょうたんビルズ
エントランス

「なるほどくん！」

「ナルホドー！…どこ行ってたんや」

「上の火を消してたんだよ。馬木さんと一緒に。あとで警察の取り

調べ」

「おひ、取り調べで思い出したわ」

「そりそり事件があつたみたいだよーーー。」

「火事のほかにも ？」

「確か60階で 警察の人が 」

（60階つて、まさか！）

6月13日 午後1時21分

ひょうたんビルズ
笹垣総合探偵事務所

「待つてよ、なるほどくーん」

ぼくはもつ高いところなど気にすることなく事務所に走つていった。

バンッー！

「笹垣ーーー！」

中には横たわる死体 宇美さんだ。

「さやあーーー！」

真宵ちゃんが叫ぶ。

「うひあーーー勝手に入っちゃダメッスうーーー！」

入った瞬間怒鳴られる。

「あんたなんでここにいるツスか！！」

「イトノ」刑事一、ぼくは笹垣と古い友人で

「モツスか。じゃああんたには残念な報告ツス」

まさか とは思った。

「たつた今、笹垣 午藏を田所 宇美殺害容疑で逮捕したツス」

(――――――)

「我々が駆けつけたときに、この事務所に横たわるこの被害者と逃げようとした容疑者がいたってワケツス」

「そんな」

ぼくの頭のなかは真っ白になつた。やつはそんなことするはずがない や、出来っこないんだ。だつて 。

「とにかく、今日はこの事務所に関係のある者は取り調べを受けるツス。」

取り調べは事務所の関係者だけでなく、ヒルズにいた従業員なども受けた。そのせいか、ぼくも解放されたのが夜8時を過ぎていた。

第2章【逆転のみち】探偵パート・2

6月14日 午前8時46分

成歩堂法律事務所

あれから取り調べがあり、解放されたのは9時前だった。イトノ口刑事によると宇美さんは絞殺されたとのことだった。篠塙はいま留置所にいるそうだ。

「おはよ」

真宵ちゃんが眠たげに部屋に入ってきた。

「あ、おはよう。眠れた？」

「全然。そうだ、早く篠塙さんのところに行ひつよー。」

（それもそうだな。篠塙 大丈夫かな）
ぼくたちはすぐに留置所に向かった。

6月14日 午前9時32分

留置所 面会室

「篠塙さん大丈夫かな？」

「あいつは強い男だ、きっと大丈夫」

「そういえばなるほどくん、篠塙さんと仲良くなつたときの話してよー途中だつたじゃない」

「ああそれか。あれは」

ガチャリ

「な 成歩堂」

「大丈夫か？」

「なんとかな。こんなこと初めてだからぞ」

篠塙は一睡もできなかつたみたいだ。田の下にひつすら隈が浮かんでいる。

「真宵ちゃん とか言つたかな？ちゃんと挨拶してなかつたね」と、軽く真宵ちゃんと挨拶を交わした。

「笹垣、あのときいつたいなにがあつたんだ？」

「実は俺もさつぱりなんだ」

「え？」

「そう、ちょうどトイレに入ったときだつた。事務所の応接室からドサッて物音がしたんだ。その時は気にならなかつたんだが 行つてみたら宇美ちゃんの死体が……！」

「それで、捕まつたのか」

「ああ。だが俺はなにもしていない。本當だ」

「 笹垣の目がまつすぐこいつを見ている。」

「なあ成歩堂」

「ん？」

「弁護を依頼してもいいか？」

「ああ。もちろんだ」

「俺、こんなこと初めてだからよ。いろいろ不安になつてさ」

「こんな弱気な笹垣は そう“あの時”。友達になつたとき以来だな。」

「明日10時に審理が始まるらしい」

（いつもどおり時間はないつてわけか）

「じゃあいろいろ聞くことがある。あのとき事務所関係の人は僕たち以外に誰がいた？」

「そうだな。みんな事務所の移転で荷物をこつちに運んでくる」とになつてたんだ。だからこの事件には関係がないと思つ

「それじゃあ笹垣さんしかいなくなつちやうみ」

「真宵ちゃんの言う通りだ。」

「それでもいいんだ。とりあえずあのときいなかつた事務所の人の名前教えてくれないか」

「ああ」

貝鳥万寿夫、27歳。事務所設立は彼と一緒にやつたんだ。昔から
の友人でうちの副所長をやつてる。

新田幸、24歳。

新しく入った新人で、主に事務のことをやつてもらつているよ。

剛田充、22歳。

こいつも新人だ。主に調査を担当している。俺の右腕だな。

「いまはこんなところね。なんせ前は小さい事務所だったもんだから少人数なんだ」

「よし、ちゃんと書いといたよ」

真宵ちゃんがメモをしていたみたいだ。

「たぶんみんな事務所にいると思うから、なんでも聞いてみる」

「わかった。笹垣、少しの辛抱だ」

「ああ」

ぼくは笹垣を励まし留置所を出た。

「はやく犯人見つけようね！」

「うん。今日はやることいっぱいあるしね」

6月14日 午前11時23分

ひょうたんビルズ

エントランス

エントランスには警察があちこちにいる。まだ捜査が終わっていないんだろう。ぼくたちはエレベーターに乗った。

「犯人誰だと思う？」

「まだ話を聞かない」とにはなんもわかんないなあ

エレベーターはどんどん高く昇っていく。もちろんぼくは怖い。でもそんなこと言つてられない。笹垣を助けるんだ。どうしても

6月14日 午前11時25分

ひょうたんビルズ

60階・廊下

あいからわす警察が多い。その中にイトノ「刑事」がいた。

「イトノ「刑事」！」

「おつ来たッスね。なんでも聞くッス」

なぜか妙に表情が穏やかだ。

「なにか嬉しいことでもあつたんですか？」

「なあに、なんでもないッス！」

「ところで被害者の死因はなんですか？」「ぼくは本題に入った。

「どうやら絞殺 みたいッス」

「絞殺 ロープかなんかで？」

「いやそれが、とっても太いもので絞められていたッス」

（太いもの？）
「まだそれが何かは特定できないッスが とりあえず解剖記録

渡しどくッス」

「え？ いいんですか、こんなにあつさり」

「なあに！ こないだ裁判で助けてくれたお礼ッス！」

【解剖記録】

氏名：田所 宇美

首を締められ窒息死。

検死はまだ行われていない。

「ありがとうございます！ あの 調査はしても 」

「いいッスよ！ 許可するッス。じゃあ俺はこれから捜査会議がある

「スから」

と言い残し、彼は出ていった。

「よし、とりあえず調べるか」

「なにか落ちてないかな？」

それからぼくたちは手分けして事務所の中にあるものを調べた。10分が経つて真宵ちゃんが声をかけてきた。

「なんにもないよ」

確かに証拠がない。凶器もないし、怪しいところもひとつもない。

「うーん 昨日と違うところでもあればなあ」

真宵ちゃんはソファーに座りこんだ。

（昨日の部屋の様子を思い出すか）

まず事務所に入ると広さ10畳ぐらいの応接室がある。入口は西にあり、入口横の壁に段ボールが積み重なっている。反対の東側は窓ガラスがあり、部屋の中央には全てガラスでできた洒落たテーブルがある。その両脇にはソファー、観葉植物。そして奥には所長室につながるドアがある。

宇美さんの死体は、窓のそばに横たわっていた。そして凶器りしきものはそばにはなかった。

「どうしてなんにもないんだろ？」

「え？」

「不思議だよね。何にもないってのも」

たしかに真宵ちゃんの言つとおりだ。イトノ「刑事なら証拠について教えてくれるはずなのにも言つていなかつた。

「またあとで来よう。まだ会つていない人もいるし」

「うん！」

僕たちはその場を後にし、事務所関係者に話を聞くことにした。

6月14日 午後12時3分

ひょうたんビルズ

エントランス

警察の取調べが行われているのは1階の会議室だった。今事務所関係者3人が取調べを受けている。

「とりあえず取調べが終わるの待つしかないな」

「もし笹垣さんが犯人じゃないとしたら・・・この3人が？」

「いや、それはわからないよ」

「え？」

「もしかしたら外部の犯行かもしないし、まだなんとも言えないね」

「うーん、もしかして恋敵の犯行・・・！？」

「・・・んん！？」

「所長の笹垣さんが好きな田所さんにライバルがいて、その人が妬いて殺した・・・！」

「なんでそうなるの！？」

「だつて昨日やつてた月曜サスペンスで」

「それはドラマだろう！」

最近真宵ちゃんはサスペンスにはまっていて、事務所にいるときもたまに見ている。

「違うかな・・・」

「違う。絶対違う」

「じゃあもし当たつたら1週間ご飯おごりだからね」

真宵ちゃんが小指を出してくる。僕も自信満々に小指を出し指きり

げんまんをした。

力チヤツ

不意にドアが開いた。

「あなたたちは？」
女性が姿を現した。

「ほくたちは篠垣所長の依頼できました、弁護士の成歩堂です。あなたは・・・新田幸さんですか？」

「これはこれは……お忙しいと」「ありがとうございます」
そこに立つ女性は宇美さんと同じく礼儀正しい感じが見て取れた。
服装は控えめで、唯一ネックレスが目立っている。

「ねべじひん」

「 ジャンルを聞かれていた」

1階のHントランスにはちよつとしたお店が並んでいて、僕たちはその中のカフェに入った。中は少し混んでいて、事件が起こった後のように思えない。角の席が空いたので、そこに座ることができた。

「このカフェはひょうたんビルズが建つ前からあって、1回閉店してここにリニューアルオープンしたの。私ここがお気に入りで」

「いやあ新田さんは以前からここに住んでいたんですね？」

住んでます

「本当にですか！」

「すぐ近くですね！」

「ええ、だから成歩堂さんのことは存じてますわ」

ホテルバンドーは、事務所の向かいにあるホテル。ところは新田さんの家にはものの数秒で行けてしまつ。

「そういえば、事件のことを聞きたに？」

「はい。昨日のことですが、アリバイの確認お願いできますか」

「昨日は移転の作業もありました。まだ荷物が前の事務所に残つていて、それを運んでいました。お手伝いさんもいるので聞いてみたらわかると思います」

「じゃあ事件当時はひょうたんビルズにはいなかつたつてことですね？」

「はい・・・ちなみに前の事務所はこゝから車で1時間かかるので、すぐ来ることは無理だと思います」

「なるほどくん、新田さんは違つんぢやない？」

真宵ちゃんが小声で言つてきた。

「まだわからないよ。とりあえず他の人の話も聞かないとね」

「どうかしましたか」

新田さんが不安そうに言つてきた。

「あついえ・・・そのネックレスきれいですね！」

真宵ちゃんが話をそらそつとする。

「このネックレスは思い出のネックレスなんですね」

「思い出の品だつたんですね」

「もしかして・・・好きだつた人に買つてもらつたとか」

「ふふふ、少し当たつてるけど秘密よ」

新田さんが笑つてしのぐ。

「いいなあ、なるほどくん買つて」

「なんでやつなるんだよ」

それから時間は過ぎて・・・。

「じゃあ僕たちは他の人たちの話を聞いてきます。新田さんは今日

は？」

「とりあえず事務所には入れないので、家で待機します。なにかお話があつたら家のほうに訪ねてください」

新田さんに別れを告げ、店を後にした。
「なるほどくん、新田さんつていい人だよきっと」「うん、ぼくもそう思うけど・・・」「けど？」
「ううん、なんでもない。じゃあ早く他の人の話聞きに行こうか」「うん！」

僕たちはまだ会っていない2人にも話を聞くために足早にエレベーターに乗る。

? ? 月 ? ? 日 ? ? 時 ? ? 分
? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ? ?

ある暗い一室で2人が話している。

「へマ犯してないだろうな」「もちろんさ、これであいつも終わり・・・」「あいつ弁護士を雇つていた。一応氣をつけるよ」「わかった」

2人は部屋を後にした。

6月14日 午後1時

ひょうたんビルズ エレベーター内

相変わらず外には目を向けることが出来ない。・・・怖い。

「まだだめなの？」

「うん、高いところは、無理」

「やっぱり落ちたのがトラウマなのかな」

実は以前、10mもある橋がくずれて落ちたことがあるのだが。

「いや、その前から怖かったしね」

やつとエレベーターが60階に着く。開いた扉の先にはイトノ口刑事がいた。

「うわっ！」

「イトノ口刑事！ ビックリさせないでください！ …」

「それはこっちのセリフッス！ ビックスか、調査のほうは、

「ぜんぜん・・・」

すかさず真宵ちゃんが入ってくる。

「イトノ口刑事、なんで証拠品とかなんにも残つてないの？」

「あれ？ 全部回収しちゃつたスかね。じゃあ待つてろッス、今持つ

てくるツスから」

「いいんですか？」

「なあに、先日のお礼ッス」

そつ言い残し、イトノ口刑事は去つていった。

「やっぱり証拠品残つてたんだあ

真宵ちゃんは肩を落とす。

「でも”なかつた”よりはいいんじゃないかな

「そもそもうだね」

「それはそうと他の・・・あれ？」

事務所のほうに田をやると赤いものが見えた。それは廊下の床に所々あつた。

「これは、血?」

「なんでこんなところにあるんだら?」

【廊下の血痕】

廊下に点在している血痕。
誰のかはまだ不明。

「いつたい誰のかな?」

「それはいま調査中ツス

「わっ!驚かさないでください!!」

いつのまにかイトノコ刑事が後ろに立っていた。その手にはいくつかのビニール袋を持つていた。恐らく証拠品の入った袋だろう。

「これが証拠品ツス。まずはこのベルトツス」

「ベルト・・・もしかして凶器の」

「そのとおりツス。持ち主は被害者の田所宇美のものに間違いないツス。ちなみに容疑者の指紋が付いてるツス!」

「笹垣の・・・」

【ベルト】

凶器となつたベルト。

笹垣の指紋が付着。

被害者のもの。

「他にも証拠品があつたツスが、もう持ち出されたみたいツス

「持ち出された?それっていいんですか?」

「実は・・・」

イトノコ刑事が少し困惑した顔になつた。こ^レじやなんだと、事務所の中に入つた。

「実は今年に新しく検察官が採用されたッス」

「それは毎年のことなんぢやないんですか？」

「それはそうッス。でもただもんぢやないッスよ」

「でもそれって毎回のことじやない?かるま検事さんとか、ゴードー検事さんとか・・・」

狩魔豪検事。過去40年無敗の経験を持つ男。いつかの事件では散々苦しめられた。そして狩魔検事には姪がいて、その名も狩魔冥。アメリカで14歳という史上最年少で検事になり、ぼくを倒すために日本へ渡つて来た。

次にゴードー検事。突然検事局に現れた謎に包まれた男。最後にゴードー検事と戦つた事件で、彼は真宵ちゃんを救つてくれた。

「確かに真宵ちゃんの言つとおりですよ。御剣はビビつしたんですね?」

御剣怜侍。ぼくの幼馴染。検事局きつとの若手検事として有名になつた。有罪のためには裏ではいろんなことをしているという噂も立つていた。

「御剣検事殿はいま海外でご勉強されてるッス!」

「そりなんだ。元気かな」

「もうだいぶ会つてないもんね」

「そうツスねえ・・・つてその話をしてたんじゃないッス!新しい検事のことツス!」

そういうえばそうだった。ぼくと真宵ちゃんはすっかり昔に漫つていた。

「で、その新しい検事というのは?」

「名前は魔帆夏珪検事。新人の割にはできるッス」

「魔帆夏・・・?どつかで聞いたことあるよ」

「真宵ちゃん知つてるの?」

「誰だつてなあ、思い出せないや」

「・・・もしかしたら関係あるかもしねないツス！」

イトノコ刑事は大きい声で言つ。

「実は魔帆夏検事の服装が真宵さんのと似てるツス」

「じゃあもしかしたら綾里家にかかわりのある人なのかな」「でも村にそんな名字の人のなかつたと思うけど」

「とりあえず後の証拠品は明日の裁判で見るしかないツスね」

「わかりました。ありがとうございます」

「あつそうツス。今日はもう事務所の人に会えないと思つツス。1人は明日の証人として召喚されるツス」

「そんな・・・！」

「なんか行動がむちゃくちゃ早くて我々も苦労してるツス・・・それじゃ」

と言い残し彼は去つていった。明日は大変な裁判になるかもしねない。

「どうする？なるほどくん」

「どうもこうもないね。今日はこれで引き上げるしか・・・」

と思つたが、まだ調べていないところがあつた。

「そういえば応接室以外は調べてないよね」

そうだ。まだ肝心の”所長室”を見ていなかつた。事件と関係なくても見ておくか。

6月14日 午後1時11分

笠垣探偵事務所 所長室

所長室にもまだ何もなかつた。デスクが1つにダンボールが壁に積み重なり、まだ仕事が出来る状態でもないみたいだ。ここは調べる必要もないように思えたが。

「なるほどくん！」これ見て……」

いつの間にか真宵ちゃんがデスクの引き出しを開け、手紙を見つけたようだ。

「ん、どれどれ」

勝手に見るのは少し気がかりだけど、証拠がない今しかたがない。と勝手に思つて中身を見た。そこには女性の字独特の几帳面な字が並んでいた。

『私はもうすぐ死ぬかもしません。わたしはいろんな過ちを犯しました。ここに全てを証言したいと思います……』

ここから下に1本の切れ目が入つており、セロハンテープで継ぎ接ぎされている。

『明日所長が私を殺しに来るでしょう。いろんな意味で彼に迷惑をかけてきました。でもそれはわたしが元凶なのでしかたありません。・・・』

ここから下は遺書になつていて、全ては~~垣~~が原因と。

「なるほどくん、これって」

「うん。宇美さんの遺書だね、たぶん」

【田所宇美の遺書】

垣に殺されるだらうと書かれた手紙。

途中破れていたのがセロハンテープで修正されている。

「これは誰にも見せられないね」

確かに、これが裁判で提出されたら垣は確実に有罪になるかもしない。

「じゃあ今日は引き上げようか」

「明日は大丈夫?」

「まだわからないけど、なんとかしなくちゃいけないのは一緒に」とにかく事務所に戻つて明日のこと考えないと

明日はまだ知らない検事が法廷に立つ。とにかく情報を集めなくちやいけない!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8807a/>

逆転裁判～嘘と真実～

2010年10月12日04時58分発行